Tohoku University

『元朝秘史』におけるモンゴル語音訳漢字書き分けの原則
——u/üを表す漢字を事例として——

On the Rule of Using Chinese Characters Denoting Mongolian Words in *the Secret History of the Mongols*

栗林　均（Hitoshi KURIBAYASHI）*

キーワード：元朝秘史、モンゴル語、音訳、漢字の書き分け

はじめに

『元朝秘史』はチンギス・カンの一代記を中心にまとめられたモンゴルの歴史書で、13世紀に成立したと考えられる。原本はモンゴル文字で書かれていたであろうが、現存するのは14世紀の後半に漢字をもってモンゴル語の発音を写した「漢字音訳本」とよばれるものである。したがって、『元朝秘史』のモンゴル語に接するには漢字の表記を介さずには不可能であり、たとえローマ字に転写されたモンゴル語を扱うにしても、元の漢字表記がどのようにしてローマ字に変換されたのかという転写の方式について理解しておく必要がある。漢字をローマ字に転写する利点としては、可読性の向上、印刷・表記の容易さに加えて、表記の単位を音に分解して扱う利便さなどが考えられるが、逆に漢字をローマ字にすることによって切り捨てられてしまう側面もあることを忘れてはならないであろう。

本稿では、『元朝秘史』において同じ音を表すのに使われている複数の漢字がどのように使い分けられているかというひとつの事例を取り上げることによって、ローマ字転写では決して表面に出ることのない漢字の表記上の特徴について検討する。

1.

服部四郎氏は、『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』（東京、1946）において、モンゴル語を表記する漢字のローマ字転写の種類と方法について、次の3種類の方式を区別することを論じ、それぞれの転写を第一種、第二種、第三種と呼んだ（同書27-35頁）。

(1)漢字の表はす音訳当時の支那語音による転写

(2)漢字の表はす蒙古語音による転写

(3)支那語音と蒙古語音と両方を参照し、同じ漢字はいつも同じ音素文字で表はす簡略転写。

* 東北大学東北アジア研究センター

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

これらのうち、第一種転写(1)は漢字音を当時の漢語（中国語）の体系の中で捉える方式で、漢語の音声・音韻として表記される。同書139-144頁に附録として付されている「音訳漢字順位表」には、『元朝秘史』のモンゴル語を表記しているすべての漢字について中国の同時代の韻書資料を手がかりに研究した結果得られた音価が示されている。

第二種転写(2)は、それらの漢字がどのようなモンゴル語の音声・音韻を表していたか、当時のモンゴル語の体系の中で捉える方式で、モンゴル語の音声・音韻として表記される。『元朝秘史』の研究で、白鳥(1943)、Pelliot(1949)、Ligeti(1971)、小澤（1984-1986, 1987-1989）らによってこれまでに提示されたローマ字転写はこの方式とみなすことができる。

これに対して第三種転写(3)は、第一種と第二種の中間に位置する便宜的な転写方式である。この転写方式の狙いと最大の利点は、ローマ字表記から元の漢字表記面を復元できることである。第一種と第二種の転写を考慮しながら「同じ漢字はいつも同じローマ字表記をする」際の具体的な方針は次のように説明されている（服部上掲書30-31頁)。

1) 当時の漢字音として複数の音価を持つと推定される漢字についても、ひとつの漢字はひとつのローマ字表記とする。同様に当時のモンゴル語の複数の音を表していると推定される漢字についても、ひとつの漢字はひとつのローマ字表記に決める。
2) モンゴル語の音を参照しながらローマ字面を極度の簡略にし、できるだけ普通のローマ字を使う。
3) 同じローマ字で転写される漢字は、画数の少ないものから多いものへと並べ、画数の同じものは康熙字典の配列順序に従う。

服部（1946：31）によれば、Haenisch(1937)のローマ字転写方式はこの第三種転写に近いが、Haenisch のローマ字転写は同じ漢字表記であっても場合によって別のローマ字を当てるなど、第三種転写と完全に同じものではない。

服部（1946：139-144）の「音訳漢字順位表」には、『元朝秘史』でモンゴル語を表記するのに用いられている全563種類の漢字が一覧として掲げられている。この中には「阿、埃、俺、安、奥、巴、白、班、保、別、...」といった一般の漢字だけでなく「卜、惕、克、勒、木、你、児、思」等、音節末の子音を表記するのに用いられる「小字」や、「中合、中豁、中忽、中渾」等および「舌剌、舌列、舌里、舌羅、舌魯、舌来」等のように、「中、舌」といった「小字と他の漢字の組み合わせ」も含まれている。これらも「モンゴル語を表記する」という観点からすれば、他の漢字と同様に機能しているひとつの単位である。

「音訳漢字順位表」に列挙されている563種類の漢字には、それぞれに「第一種」と「第三種」という2種類のローマ字転写が付され、第三種のローマ字面に従って排列されている。ここでは議論の前提として「音訳漢字順位表」を手がかりに、『元朝秘史』におけるモンゴル語の漢字表記の性格について確認しておきたい。以下、ローマ字転写は特に断りの無い限り、第三種を指す。

「音訳漢字順位表」で目立つのは同じローマ字で転写される漢字が少なくないことである。上述のように、「同じローマ字で転写される漢字は、画数の少ないものから多いものへと並べ、画数の同

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

じものは康熙字典の配列順序に従う」という原則によって配列され、同じローマ字表記になるものは、ローマ字転写の右肩に1から順に番号が振られている。

表1.は、服部（1946：117-127）の「第十三章　結論」の冒頭に掲げられている「全音訳漢字とその使用頻度」の最初の部分から、『元朝秘史』でモンゴル語を表記するのに使用されている漢字とその第三種ローマ字転写との関係を表にしたものである（注1）。表の中の「漢字の種類」は、同じローマ字で転写される漢字がいくつあるかを示している。

表1.『元朝秘史』において同じローマ字で転写される漢字（一部）

第三種ローマ字転写	同じローマ字で転写される漢字	漢字の種類
a	阿	1
ai	唉　埃	2
am	俺　唵	2
an	安	1
ang	昂	1
au	奥	1
b	ト	1
ba	八　巴　把　杷　罷	5
bai	白　伯　拜　擺	4
ban	班　般	2
bang	邦	1
bau,	保　鴇	2
be	別	1
bei	北	1
ben	邊	1
bi	畢　鵯	2
bin	賓	1
bo	孛　駍	2
bu	卜　不　歩　捕　鏷　饆	6
bui	備	1
bun	奔	1
・・・	・・・	・・・

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

この転写方式によれば、『元朝秘史』のモンゴル語を表記している漢字が区別している「音」の種類は292種類である。ここでいう「音」とは、表1. の中で「第三種ローマ字転写」として左端の欄に並べているa, ai, am, an, ang, ba, bai, ban, bau, be, ... といった音節とb, d, g, l, m, n, r, s 等の音節末尾の子音のすべてである。これを「漢字が表す音」とすれば、表 1. の「同じローマ字で転写される漢字」というのは「同じ音を表す漢字」と言い換えることができる。

上に見たように、『元朝秘史』では563種類の漢字によって292種類のモンゴル語の音が表記されている。これは、同じ音を表す漢字がいくつもあることを意味している。実際、表 1. で見たように、同じ音を表すのに、4種類、5種類、6種類の漢字が使われている場合もあることが分かる。

次に、『元朝秘史』の漢字表記で区別されている292種類のひとつひとつの音に対して、それぞれいくつの漢字が用いられているかを表2. に示す。

表2.『元朝秘史』で同じ音を表す漢字の数

同じ音を表す漢字の数	種類
1	145
2	79
3	33
4	22
5	7
6	5
7	0
8	1

上の表で「同じ音を表す漢字の数」が「1」というのは、前頁の表 1. の右端の欄の数字が「1」の場合にあたり、これは全部で145例ある。つまり、モンゴル語の292種類の音のうち、ひとつの音を表すのにひとつの漢字だけが使われているのは145例で、全体の約半分に過ぎない。同様に、同じ音を表すのに2つの漢字が使われているのは79例、3つの漢字が使われているのは33例あることが分かる。

具体的に、どのような音を表すのにどのような漢字が使われているか、同じ音を表す漢字の数が多い順に並べたのが次頁の表3. である。

これをみると、同じ音を表すのに一番多くの漢字が使われているのは、ši を表す「失、石、拭、食、實、濕、識、釋」という8つの漢字である。次に多いのはひとつの音に対して6種類の漢字が用いられているもので、それらはbu を表す「卜、不、歩、捕、鏷、髴」、i を表す「亦、宜、翊、翼、驛、趪」、ri を表す「舌里、舌理、舌澧、舌離、舌攦、舌驪」、音節末音の r を表す「児、舌児、洏、舌洏、峏、舌峏」、u を表す「兀、屻、矹、浯、閪、嗚」となっている。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

表３．『元朝秘史』で同じ音を表す漢字（一部：種類の多い順）

漢字の表す「音」（音節、音節末子音）	左の音を表す漢字	同じ音を表す漢字の数
ši	失 石 拭 食 實 濕 識 釋	8
bu	卜 不 歩 捕 鏷 髆	6
i	亦 宜 翊 翼 驛 趪	6
ri	舌里 舌理 舌澧 舌離 舌攦 舌驪	6
r	児 舌児 洏 舌洏 峏 舌峏	6
u	兀 屼 矹 浯 閡 嗚	6
ba	八 巴 把 杷 罷	5
da	打 怛 荅 達 褡	5
de	咥 垤 迭 絰 跌	5
go	戈 果 哥 葛 歌	5
lu	祿 魯 騄 爐 鱸	5
qun	中坤 中昆 中崑 中渾 中鶤	5
so	梭 莎 雪 潚 鎖	5
bai	白 伯 拜 擺	4
čen	塵 禪 纏 躔	4
či	叱 吃 池 赤	4
čing	丞 成 誠 稱	4
・・・	・・・	・・・

このように、モンゴル語の同じ音を表すのに２つ以上の漢字が使われているのには、何か理由があるのだろうか？

陳垣氏は、『元秘史譯音用字攷』（北平、1934）で、『華夷訳語』におけるモンゴル語の漢字音訳方式が発音だけを表した単純な音訳であるのに対し、『元朝秘史』の漢字音訳方式は音だけでなくモンゴル語の意味を加味した漢字を選んで使っている点に特徴があると指摘して、『元朝秘史』における「モンゴル語の意味を考慮した漢字音訳方式」の実例を詳細に調査し、分類している。その典型的なひとつの例として、『華夷訳語』では「兀」と表記されているものが『元朝秘史』ではモンゴル語の「山」を表す単語では「阿屼剌」と山偏の「屼」の漢字を用い、モンゴル語の「湖」を表す単語では「納浯児」と水に関係する「浯」の字を用い、モンゴル語の「話す、語る」を表す単語では「嗚詁列」と口偏の「嗚」の字を用いていることが指摘されている。

『元朝秘史』における「モンゴル語の同じ音を表すのに２つ以上の漢字が使われている」状況は、

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

このような「意味を加味した漢字の使用法」と関連していることは疑いない。しかし、こうした「意味を加味した漢字の使用法」がどの程度に行われているのかについては必ずしも明らかであるとは言えない。たとえば、『元朝秘史』ではモンゴル語の「山」を表す単語が「阿屼剌」と表記されている例があるのは確かであるが、「阿兀剌」のように山偏のつかない「兀」が使われている例もまた存在している。「阿屼剌」と「阿兀剌」の表記のうち、一方が規則的で他方が例外と見なしうる程度の使い分けの差は存在するのだろうか？換言すれば、「意味を加味した漢字の使用法」は一貫した原則に基づいて行われているのであろうか、それとも散発的に現れる表記なのであろうか？また、「屼」という漢字はモンゴル語の a'ula「山」という語にしか用いられていないのであろうか、それとも別の語の表記にも用いられているのであろうか？さらに、「モンゴル語の同じ音を表すのに２つ以上の漢字が使われている」状況は、すべて「意味を加味した漢字の使用法」に起因するものなのか、あるいはそれ以外の理由もあるのか、という疑問も生じる。

こうした疑問に答えるためには、ひとつの音あるいはひとつの漢字に関して、全巻を網羅的に調査しなければならない。本稿では、「モンゴル語の同じ音を表すのに２つ以上の漢字が使われている」事例のひとつとして、取り上げて、『元朝秘史』におけるそれぞれの漢字の使用状況を全巻にわたって網羅的に調査し、それらの使い分けの実態を明らかにする。

2.

ここでは、モンゴル語の u/ü という音節（服部氏の第三種転写では u）を表すのに用いられている漢字を取り上げる（注 2)。

『華夷訳語』ではモンゴル語の u/ü を音訳するのに使われている漢字は「兀」１種類しかない。これに対して『元朝秘史』では「兀」「鳴」「屼」「浯」「閔」「矻」という６種類の漢字が使われている。『元朝秘史』におけるそれらの出現回数は次の通りである：

兀－ 4,265 回（注 3)
鳴 － 451 回
屼 － 26 回（注 4)
浯 － 25 回
閔 － 23 回（注 5)
矻 － 1 回

使われている漢字によって使用回数が極端に偏っていることが分かる。6 種類の漢字の中で最も多く使われているのは「兀」であり、使用回数は全体の約 9 割（89.0 パーセント）に達している。次に多く用いられているのは「鳴」で、全体の１割弱（9.4 パーセント）である。残りの４字（「屼」「浯」「閔」「矻」）に関しては、使用回数はそれぞれ全体の１パーセントにも満たない。これにより、『元朝秘史』でモンゴル語の u/ü を表す漢字として最も一般的に用いられているのは「兀」であ

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

り、「屹」「涪」「閔」「砑」の4字が用いられているのは特殊な場合ではないかという予想が成り立つ。以下、それぞれの漢字がどのように使われているか、具体的な調査の結果を示し、検討する。

2－1.

漢字「兀」は、『元朝秘史』全巻を通して4,265回現れる。「兀」は、上に見たようにモンゴル語の音節 u/ü を表すのに最も多く使われる漢字であり、男性語と女性語に関わりなく、また語頭、語中、語末、語尾（接尾辞）いずれの位置にも用いられている。品詞や意味による使用の制限も認められず、『元朝秘史』でモンゴル語の音節 u/ü を表す最も一般的な漢字として用いられている。これを表4. に示す。(注6)

表4.『元朝秘史』における漢字「兀」の使用状況

使用される条件	漢字	使用例	出現回数
「u/ü」を表す音節（男性語、女性語；語頭、語中、語末、語尾）	兀	兀孫（usun, 水）、兀格（üge, 言語） 兀訥罷（unu=ba, 騎了）、兀者罷（üje=be, 見了） 兀兀児[中]合（u'urqa, 套馬竿）、卯兀（mawu, 歹） 保兀罷（bawu=ba, 下了）、迭兀（de'ü, 弟） 阿主兀（a=ǰu'u, 有来）、亦[舌]列主兀（ire=ǰü'ü, 来了） 等々。	4,265

2－2.

漢字「鳴」は、『元朝秘史』全巻を通して451回使われている。その内訳は、モンゴル語の動詞 ügüle=「話す、語る」の活用形に421回、その派生語である相互態動詞 ügüleldü=「語り合う」の活用形に20回、受動態動詞 ügülekde=「語られる」の活用形に8回、使役態動詞 ügüle'ül=「語らせる」の活用形に2回となっている。それらの語形と使用回数を列挙すれば次の通りである。例は漢字音訳表記に続けてかっこの中にローマ字転写形、漢字傍訳形、出現位置を示す（注7）。

(1)動詞 ügüle=「話す、語る」の活用形：421回

鳴詰列（ügüle=, 説 01:33:05他）16回。(注8)

鳴詰列罷（ügüle=be, 説了 01:21:03他）5回。

鳴詰列畢（ügüle=bi, 説了 01:12:06）1回。

鳴詰列額速（ügüle=esü, 説呵 01:21:02他）6回。

鳴詰列額[場]（ügüle=et, 説了 07:42:01）1回。

鳴詰列古（ügüle=gü, 説 11:31:04他）4回。

鳴詰列周（ügüle=ǰü, 説着 01:33:03他）33回。

鳴詰列主兀（ügüle=ǰü'ü, 説了有 07:09:09他）3回。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

嗚詁列主為（ügüle=jü'üi, 説了有 06:16:03 他）3 回。

嗚詁列克先（ügüle=ksen, 説了的 03:04:06 他）8 回。

嗚詁列克薛泥（ügüle=ksen-i, 説来的 05:50:06 他）3 回。

嗚詁列克薛惕（ügüle=kset, 説了的 08:15:05）1 回。

嗚詁列恢突舌児（ügüle=küi-ṭür, 説的行 05:48:04）1 回。

嗚詁列坤（ügüle=kün, 説的每 09:25:02）1 回。

嗚詁列列額（ügüle=le'e, 説来 03:01:08 他）4 回。

嗚詁列魯額（ügüle=lü'e, 説来 12:04:05 他）2 回。

嗚詁列木（ügüle=mü, 説有 01:21:04 他）4 回。

嗚詁列梅（ügüle=müi, 説有 06:06:02 他）3 回。

嗚詁連（ügüle=n, 説 05:43:02 他）6 回。

嗚詁列舌論（ügüle=rün, 説 01:08:07 他）306 回。

嗚詁列速（ügüle=sü, 説我 08:24:10）1 回。

嗚詁列惕（ügüle=t, 説 01:13:04 他）3 回。

嗚詁列惕坤（ügüle=tkün, 説您 06:45:08 他）4 回。

嗚詁列由（ügüle=yü, 説有 05:31:02 他）2 回。

(2)動詞 ügüleldü=「語り合う」（ügüle=の相互態）の活用形：20 回

嗚詁列勒都周（ügüleldü=jü, 共説着 05:37:07 他）3 回。

嗚詁列勒都克薛惕（ügüleldü=kset, 共説来的每 05:15:06）1 回。

嗚詁列勒都克先（ügüleldü=ksen, 共説了的 05:15:02 他）3 回。

嗚詁列勒都列額（ügüleldü=le'e, 共説来 08:17:05 他）2 回。

嗚詁列勒都魯埃（ügüleldü=lü'ei, 共説来 06:22:02）1 回。

嗚詁列勒都舌侖（ügüleldü=rün, 共説 01:10:10 他）9 回。

嗚詁列勒都[惕]坤（ügüleldü=[t]kün, 共説 08:20:10）1 回。（注 9）

(3)動詞 ügülekde=「語られる」（ügüle=の受動態）の活用形：8 回

嗚詁列克迭古（ügülekde=gü, 被説有 12:19:07）1 回。

嗚詁列克迭周（ügülekde=jü, 被説着 05:42:05 他）5 回。

嗚詁列克迭坤（ügülekde=kün, 説的每 12:49:08）1 回。

嗚詁列克顛（ügülekde=n, 被説 11:35:09）1 回。

(4)動詞 ügüle'ül=「語らせる」（ügüle=の使役態）の活用形：2 回

嗚詁列兀勒周（ügüle'ül=jü, 教説着 12:05:04 他）2 回。

これらは、『元朝秘史』において用いられている漢字「嗚」のすべてである。

一方、『元朝秘史』において動詞 ügüle=「話す、語る」に関する語が上に挙げた以外にも使われているかどうか調査すると、『元朝秘史』全巻を通じて、ügüle=「話す、語る」の活用形およびその

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

派生語（使役態 ügüle'ül=、受動態 ügülekde=、相互態 ügüleldü=）の活用形は 453 回用いられており、その内訳は、上に列挙したものが 451 回、それ以外には次の 2 例があるに過ぎない。

兀詁列額速（ügüle=esü, 説呵 04:46:06）

兀詁列（ügüle=, 説 11:31:03）

つまり、ügüle=「話す、語る」およびその派生語（使役態 ügüle'ül=、受動態 ügülekde=、相互態 ügüleldü=）の活用形は『元朝秘史』で 453 例現われ、このうち第 1 音節の母音を表すのに「鳴」と書かれているものは 451 例、「兀」と書かれているものは 2 例である。これにより、漢字「鳴」は『元朝秘史』では動詞 ügüle=「話す、語る」およびその派生語を表記するための漢字としてのみ使われており、その使用法は徹底している。

上の 2 例にのみ（「鳴」ではなく）「兀」と書かれているのには、何か理由があるのだろうか？前者の場合、原文ではモンゴル語の üge ügüle=esü「言葉を話せば」という語句を「兀格兀 詁列額速」と、語の境界を間違って音訳しており、ügüle=という動詞が認識されていなかったと考えられる。後者の場合は、「鳴」と書かれるべきところを、不注意で「兀」が書かれたものであろうか。

表５．『元朝秘史』における漢字「鳴」の出現回数とその内訳

使われる語	漢字	例	回数
ügüle=「話す、語る」およびその派生語 ügüleldü=（相互態） ügülekde=（受動態） ügüle'ül=（使役態） の活用形	鳴	鳴詁列舌論（ügüle=rün, 説） 鳴詁列克先（ügüle=ksen, 説了的） 鳴詁列周（ügüle=jü, 説着） 鳴詁列勒都舌侖（ügüleldü=rün, 共説） 鳴詁列克迭周（ügülekde=jü, 被説着） 鳴詁列兀勒周（ügüle'ül=jü, 教説着） 等々。	451
	兀	兀詁列額速（ügüle=esü, 説呵） 兀詁列（ügüle=, 説）	2

ところで、これらの例にはすべて傍訳に「説」の字が付されている。傍訳がモンゴル語を漢字に音訳する際に関わっていたであろうことは想像に難くない。ただし、『元朝秘史』において傍訳「説」が付されているのは動詞 ügüle= に関連する語だけでなく、動詞 ke'e=/ke:=「言う」、kelele=「話す」の活用形でも傍訳に「説」の字が付されているので、この場合音訳と傍訳に一対一の対応関係を認めることはできない。たとえば「鳴詁列罷（ügüle=be）」にも、客額罷（ke'e=be）にも「説了」という傍訳が付されている。音訳漢字は、漢語傍訳から自動的に導き出されるようなものではないにしても、「意味を考慮した」音訳の作業は漢語傍訳に依存するところが少なくなかったと思われる。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

2－3.

漢字「屹」は、『元朝秘史』全巻を通して26回現われる。その内訳はモンゴル語の名詞a'ula「山」およびその曲用形に19回、名詞a'ula「山」から派生した動詞a'ulala=「山に登る」の活用形に1回、現れ、山名・地名を表す固有名詞の表記に6回使われている。それらを語形ごとに列挙すれば次の通りである。

(1) 名詞a'ula「山」およびその曲用形：19回

阿屹剌 (a'ula, 山 03:30:01, 04:49:05, 04:49:06, 05:28:07, 07:36:01, 07:37:03, 07:37:03, 07:38:03, 07:39:03, 07:42:06, 10:19:10, 11:01:09) 12回

阿[中]兀[屹]剌(a'ula, 山 07:34:08)1回 (注10)

阿屹剌突[舌]児 (a'ula-ṭur, 山行 03:30:07) 1回

阿屹剌突[舌]児 (a'ula-ṭur, 山裏 07:42:07) 1回

阿屹剌因 (a'ula-yin, 山的 07:39:02, 07:39:10) 2回

阿屹剌亘 (a'ula-yi, 山行 07:42:10) 1回

阿屹剌思 (a'ulas, 山毎 12:32:01) 1回

(2) 動詞a'ulala=「山に登る」の活用形：1回

阿屹剌剌[黒]撒[楊] (a'ulala=qsat, 山上了的毎 12:07:06) 1回

(3) 山名・地名を表す固有名詞（「屹」が2回使われているものが2つある）

阿剌屹屹[楊] (Ala'u'ut, 山名 04:03:10)

斡[舌]嶇訥屹因 (Or_nu'u-yin, 山名的 06:19:02)

忽剌阿訥屹[楊]孛[勒]荅屹[楊]塔 (Hula'anu'ut_bolda'ut-ta, 山名行 06:22:01)

土屹剌因 (Tu'ula-yin, 地名的05:36:07)

これらが、『元朝秘史』における漢字「屹」の使用例のすべてである。

一方、『元朝秘史』においてモンゴル語の名詞a'ula「山」および動詞a'ulala=「山に登る」に関連した語（曲用形・活用形）の現われを調査すると、全部で23例見出され、上記20例の他に次の3例があることが分かる（いずれも同じ形である）：

阿兀剌因(a'ula-yin, 山的 07:32:07, 08:09:06, 08:44:03)

つまり、名詞a'ula「山」および動詞a'ulala=「山に登る」に関連した語は『元朝秘史』の全巻を通して23回現われ、このうちそれらの第2音節のuを表す漢字としては「屹」が20回使われ、「兀」が3回使われている。こうしてみると『元朝秘史』ではモンゴル語の名詞a'ula「山」に関連する語の第2音節のuには「屹」という漢字を使う規範が存在していたと考えられる。例外的な3例に（漢字「屹」ではなく）「兀」が書かれているのは、音訳漢字として山偏は無くても音に影響がないことから、不注意によって山偏を付け忘れたものであろう。

次に、固有名詞についてみると、『元朝秘史』で漢字傍訳に「山名」を含む語は83回現われる。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

このうち、音節 u/ü を含む語は 3 例ある。それらはす上に挙げた 3 例であり、音節 u/ü は漢字「屻」で表記されている（そのうちの 2 例は「屻」が 2 回現れる）。

また、固有名詞に「地名」という漢字傍訳の付されたものは『元朝秘史』に 155 回現われる。このうち、音節 u/ü を含む語は 25 例あるが、漢字「屻」を含むものは上掲の 1 例だけで、漢字「兀」を含むものは 24 例見られる。つまり、漢字傍訳に「地名」とある固有名詞の表記に漢字「屻」が使われているのはむしろ例外的といえる。実際、土屻剌因（Tu'ula-yin, 地名的）の Tu'ula は、河の名である。この名は、これ以外に 5 回現れるが傍訳は次のようにすべて「河名」である：

土兀剌因（Tu'ula-yin, 河名的 02:39:06）

土兀剌 沐舌漣訥（Tu'ula_müren-nü, 河名河的 03:01:03）

土兀剌因（Tu'ula-yin, 河名 03:25:03）

禿浯剌因（Tu'ula-yin, 河名的 06:25:05）

土浯剌因（Tu'ula-yin 河名的 06:27:05）

河の名前の表記に「土屻剌因」と漢字「屻」を使ったのは、音訳者がこれを山の名と誤解したためであることは疑いない。

表６．『元朝秘史』における漢字「屻」の出現回数とその内訳

使われる語		漢字	例	回数
a'ula「山」の曲用形およびその派生語 a'ulala=「山に登る」の活用形		屻	阿屻剌（a'ula, 山） 阿屻剌思（a'ulas, 山毎） 阿屻剌因（a'ula-yin, 山的） 阿屻剌突舌児（a'ula-ṭur, 山行） 阿屻剌剌黒撒場（a'ulala=qsat, 山上了的毎）、等。	20
		兀	阿兀剌因（a'ula-yin, 山的）	3
固有名詞	山名	屻	阿剌屻屻場（Ala'u'ut, 山名 斡舌峏 訥屻因（Or_nu'u-yin, 山名的） 忽剌阿訥屻場 孛勒荅屻場塔（Hula'anu'ut_bolda'ut-ta, 山名行）	5
	地名	屻	土屻剌因（Tu'ula-yin, 地名的）	1
		兀	兀魯黒 塔黒（Uluq_taq, 地名） 斡舌児 訥兀因（Or_nu'u-yin, 地名的） 朶羅安 孛勒荅兀場塔（Dolo'an_bolda'ut-ta, 地名行） 中合迪黒里黒 你[舌]魯兀訥（Qadiqliq_niru'un-u, 地名的）、等。	24

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

以上を総合すれば、漢字「岈」は『元朝秘史』では名詞 a'ula「山」（およびその派生語）の第 2 音節の u を表記するために、またそれ以外では傍訳に「山名」と付された固有名詞で音節 u/ü を表記するため用いられている。

2－4.

漢字「捂」は、『元朝秘史』全巻を通して 25 回現れる。このうち、モンゴル語の名詞 na'ur「湖」およびその曲用形の第 2 音節の母音 u を表すのに用いられているものが 14 回、水名・河名を表す固有名詞の表記に用いられているものが 11 回ある。名詞 na'ur「湖」は、14 回のうち 13 回までが「～湖」のように湖名を表す固有名詞とともに用いられている。それらを語形ごとに列挙すれば次の通りである。

(1)名詞 na'ur「湖」およびその曲用形：14 回

捕魚児 納捂児（Buyur_na'ur, 水名 海子 01:32:09）

闊漣 納捂児（Kölen_na'ur, 海子名 01:32:09）

闊闊 納捂児（Kökö_na'ur, 青 海子 02:27:03）

闊闊 納捂舌児（Kökö_na'ur, 海子名 03:42:04, 03:42:04）

哈舌澧汃禿 納捂舌剌（Hariltu_na'ur-a, 水名 海子行 04:18:02）

捕魚舌児 納捂舌児途舌児（Buyur_na'ur-tur, 海子名 海子行 06:19:08）

古洩兀舌児 納捂舌剌（Güse'ür_na'ur-a, 水名 海子行 06:27:02）

乞赤渤 巴石 納捂舌剌（Kičil_Baš<i>_na'ur-a, 海子名 海子行 06:28:07）

巴勒渚納 納捂舌児（Balǰuna_na'ur, 海子名 海子 06:43:08, 08:44:05）

巴渤渚納 納捂[舌]剌察（Balǰuna_na'ur-ača, 水名 海子處 06:46:09）

巴勒渚納 納捂舌剌察（Balǰuna_na'ur-ača, 海子名 海子行 08:44:06）

納捂舌児（na'ur, 海 11:27:03）

(2) 水名・河名を表す固有名詞：11 回

捂勒札（Ulǰa, 水名 04:11:03, 04:12:04, 04:13:08）

捂勒札因（Ulǰa-yin, 水名的 04:13:09）

捂渤中灰（Ulqui, 水名 06:15:01）

捂舌籠古（Ürünggü, 水名 06:28:07）

禿捂剌因（Tu'ula-yin, 河名的 06:25:05）

土捂剌因（Tu'ula-yin, 河名的 06:27:05）

捂剌（Ula, 河名 11:18:09）

納捂（Na'u, 河名 11:18:09）

討捂舌児 沐舌漣（Tawur_müren, 河名河 11:19:05）

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

これが『元朝秘史』における漢字「捂」の使用例のすべてである。

ここで、『元朝秘史』でモンゴル語の名詞 na'ur「湖」およびその曲用形の現われを調査すると、それらは全部で17例あることが分かる。このうち、漢字「捂」が使われているのは上掲の14回で、「兀」が書かれているものは次の3例である：

古泄兀舌児 納兀舌剌 (Güse'ür_na'ur-a, 海子名 海子行 05:11:08)

乞濕渕 巴失 納兀舌剌 (Kišil_Baš_na'ur-a, 海子名 海子行 05:28:09)

納兀舌児 (na'ur, 海子般 07:32:03)

次に固有名詞についてみると、「水名」という漢字傍訳の付されたものは『元朝秘史』に39回現われる。このうち、音節 u/ü を含むものは17回あり、それの音訳に漢字「捂」が使われているのは上掲の6回であるが、それ以外に漢字「兀」が使われているものが11回ある。

また、「河名」という漢字傍訳の付されたものは『元朝秘史』に107回現われる。このうち、音節 u/ü を含むものは10回あり、名前の音訳に漢字「捂」が使われているのは上掲の5回で、漢字「兀」が使われているものは5回ある。

表7.『元朝秘史』における漢字「捂」の出現回数とその内訳

使われる語		漢字	例	回数
na'ur「湖」およびその曲用形		捂	納捂舌児 (na'ur, 海) 捕魚児 納捂児 (Buyur_na'ur, 水名 海子) 哈舌澧汃禿 納捂舌剌 (Hariltu_na'ur-a, 水名 海子行)、等。	13
		兀	納兀舌児 (na'ur, 海子般 07:32:03) 古泄兀舌児 納兀舌剌 (Güse'ür_na'ur-a, 海子名 海子行) 乞濕渕 巴失 納兀舌剌 (Kišil_Baš_na'ur-a, 海子名海子行)	3
固有名詞	傍訳「水名」	捂	捂勒札 (Ulǰa, 水名) 捂渕中灰 (Ulqui, 水名) 捂舌籠古 (Ürünggü, 水名)	6
		兀	兀舌瀧古 (Ürünggü, 水名) 中合舌剌 洩兀勒(Qara_se'ül, 水名)、等	11
	傍訳「河名」	捂	禿捂剌因 (Tu'ula-yin, 河名的) 捂剌 (Ula, 河名) 討捂舌児 沐舌漣 (Tawur_müren, 河名河)、等	5
		兀	土兀剌因 (Tu'ula-yin, 河名的) 土兀剌 沐舌漣訥 (Tu'ula_müren-nü, 河名河的) 兀勒中灰 失魯格勒只惕帖 (Ulqui_Šilügeljit-te, 河名)、等。	5

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

このように、「涪」はモンゴル語の名詞 na'ur「湖」およびその曲用形の第2音節の u を表す以外に、湖と河の名前の中の音節 u/ü を表記するのに用いられている。ただし固有名詞の表記は必ずしも徹底しているとは言いがたい。

2－5.

漢字「閨」は『元朝秘史』の全巻を通して23回現れる。その内訳は、モンゴル語の名詞 e'üte(n)/e'üde(n)「門」およびその曲用形の第2音節の ü を表しているものが19回、e'üte(n)/e'üde(n)の派生語 e'ütenči/e'üdečin「門番」の第2音節の ü を表しているものが3回、ala'un「後門」の曲用形の第3音節の u を表しているものが1回である（注11）。

(1) 名詞 e'üte(n)/e'üde(n)「門」の曲用形：19回

額閨闐（e'üten, 門 02:09:05, 04:22:10, 05:44:05, 09:47:08, 10:38:09, 10:40:05, 12:10:02）

額閨闐訥（e'üten-nü, 門的 04:22:03, 06:39:02）

額閨迭訥（e'üden-ü, 門子的 09:06:01）

額閨闐圖児（e'üten-tür, 門裏 01:46:08）

額閨闐突舌児（e'üten-ṭür, 門裏 03:21:08, 門行 07:20:09）

額閨闐突児（e'üten-ṭür, 門裏 10:05:07）

額閨闐都舌里顔（e'üten-dür-iyen, 門自的行 03:21:09）

額閨闐捏徹（e'üten-neče, 門行 04:22:04, 04:23:01）

額閨闐別舌児（e'üte<n>-ber, 門裏 03:20:07, 03:20:08）

(2) 名詞 e'ütenči/e'üdečin「門番」（e'üte(n)/e'üde(n)「門」の派生語）：3回

額閨闐赤（e'ütenči, 把門的每 07:20:06）

額閨迭臣（e'üdečin, 把門的每 07:21:02, 把門的 10:05:07）

(3) 名詞 ala'un「後門」の曲用形：1回

阿剌閨納（ala'un-a, 門後行 09:13:02）

これが『元朝秘史』における漢字「閨」の使用例のすべてである。

一方、『元朝秘史』において、モンゴル語の名詞 e'üte(n)/e'üde(n)「門」およびその曲用形は全巻を通じて30回現われる。このうち第2音節を表す漢字に「閨」が使われているのは上掲の22回であり、それ以外は「兀」が使われている次の8例である。

額兀闐（e'üten, 門 10:39:05, 12:40:05, 10:42:10, 12:42:05）

額兀闐突舌児（e'üten-ṭür, 門行 12:37:07）

額兀顛（e'üden, 門 08:43:09）

額兀迭延（e'üde-en, 門自行 02:41:09）

額兀迭帖泥（e'üdeten-i, 門有的每行 08:30:04）

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

また名詞、e'ütenči/e'üdečin「門番」の曲用形は全巻を通じて4回現われ、そのうち第2音節を表す漢字に「閃」が使われているのは上に見た3回で、「兀」が使われているのは次の1回である。

額兀迭臣（e'üdečin, 管門的 12:40:06）

さらにala'un-a「後門に」に関連した語は3回使われており、そのうち「閃」が使われているのは上掲の1例で、他の2例では次のように「兀」が使われている。

阿剌兀納（ala'un-a, 門後行 05:39:01, 05:39:04）

漢字「閃」が、モンゴル語の名詞e'üten/e'üde(n)「門」の第2音節のüを表すための漢字として使われていることは疑いないが、このように使用状況は徹底しているとは言いがたい。表記が徹底しなかったのは、「閃」という漢字が特殊なものだったためではないだろうか。

表8.『元朝秘史』における漢字「閃」の出現回数とその内訳

使われる語	漢字	例	回数
e'üte(n) e'üde(n) 「門」	閃	額閃闥（e'üten, 門） 額閃闥突^{舌}児（e'üten-ṭür, 門裏） 額閃闥訥（e'üten-nü, 門的） 額閃闥捏徹（e'üten-neče, 門行）、等。	22
	兀	額兀闥（e'üten, 門） 額兀闥突^{舌}児（e'üten-ṭür, 門行） 額兀顛（e'üden, 門） 額兀迭帖泥（e'üdeten-i, 門有的毎行）、等	9
e'ütenči e'üdečin 「門番」	閃	額閃闥赤（e'ütenči, 把門的毎） 額閃迭臣（e'üdečin, 把門的毎）、等	3
	兀	額兀迭臣（e'üdečin, 管門的）	
ala'un-a	閃	阿剌閃納（ala'un-a, 門後行）	1
	兀	阿剌兀納（ala'un-a, 門後行）	2

2－6.

漢字「矻」は『元朝秘史』でモンゴル語のniru'ut（嶺々）に1回だけ用いられている。

你^{舌}路矻$_{楊}$（niru'ut, 嶺毎 06:45:03）

この単語はniru'un（嶺）の複数形であるが、『元朝秘史』でniru'un（嶺）に関連した語は、全部で3回現われる（注12）。このうち、音節u/üの含まれるものは2回で、「矻」が書かれているのは上の1例で、他の1例は固有名詞と同格で用いられている次の1例で「兀」が書かれている。

^{中}合迪$_{黒}$里$_{黒}$ 你[^{舌}]魯兀訥（Qadiqliq_niru'un-u, 地名的 06:27:09）

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

表９．『元朝秘史』における漢字「矹」の出現回数とその内訳

使われる語	漢字	例	回数
niru'ut (niru'un)	矹	你[舌]路矹[場]（niru'ut, 嶺毎）	1
	兀	[中]合迪[黒]里[黒] 你[[舌]]魯兀訥（Qadiqliq_niru'un-u, 地名的）	1

漢字「矹」が使われているのは一例だけであるが、もう一方の例で「矹」を使わなかったのは、傍訳にも単に「地名」とあることから、モンゴル語 niru'un（嶺）が意識されなかったためと考えられる。

３．

ここまで『元朝秘史』において、モンゴル語の u/ü を音訳するのに使われている「兀」「鳴」「屼」「浯」「閔」「矹」という６種類の漢字の使い分けを見てきた。これを次のようにまとめることができる。

兀（4, 265 回）－モンゴル語の音節 u/ü を表記する一般的な漢字として、最も広範囲に用いられている。

鳴（451 回）－モンゴル語の動詞 ügüle=「話す、語る」の活用形（使役形 ügüle'ül=、受動形 ügülekde=、相互形 ügüleldü= を含む）の第１音節の ü を表すために使われている。

屼（26 回）－モンゴル語の名詞 a'ula「山」（およびその曲用形、派生語）の第２音節の u を表し、また山名を表す固有名詞の中の音節 u/ü を表記するのに用いられている。

浯（25 回）－モンゴル語の名詞 na'ur「湖」（およびその曲用形）の第２音節の u を表し、湖と河を表す固有名詞の中の音節 u/ü を表記するのに用いられている。固有名詞の表記はあまり徹底していない。

閔（23 回）－モンゴル語の名詞 e'üten/e'üde(n)「門」（およびその曲用形、派生語）の第２音節の ü を音訳するのに用いられている。

矹（1 回）－モンゴル語の名詞 niru'ut「嶺々」の第３音節の u を表記するのに用いられている。

このように、これらの漢字の使い分けは、すべて「モンゴル語の意味を考慮して、意味に関連した漢字を使う」ためのものである。注目に値するのは、これらの漢字の使用は特定のモンゴル語の単語に限られていることである。上に見たように、「鳴」は ügüle=「話す、語る」の、「屼」は a'ula「山」の、「浯」は na'ur「湖」の、「閔」e'üten/e'üde(n)「門」の、「矹」は niru'ut「嶺々」の音訳に用いられており、それ以外の場合には意味的に関連がありそうに見えてもこれらの漢字は使われていない。たとえば、モンゴル語の üge「ことば、語」は意味的には「言葉」や「口」に関連する語であろうが「鳴」の字は使われずに「兀格」と音訳されており、モンゴル語の usun「水」は水に関連する語であっても「浯」の字は使われずに「兀孫」と音訳されている。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

これから考えられることは、モンゴル語の漢字音訳はその場で意味の関連を考えながら行われたものではなく、あらかじめ周到に準備された対訳語彙のリストにのっとって組織的・体系的に行われたのではないかということである。対訳語彙リストは、おそらく『華夷訳語』のようなもので、

説 － 鳴詁列、山 － 阿屼剌、海子 － 納浯児、門 － 額閃闡、言語 － 兀格、水 － 兀孫

等々と記されていたことが推定されよう。動詞はあるいは活用形ごとのリストになっていたかも知れない。さらに想像を逞しくすれば、もともとはこれらのリストは『華夷訳語』と同様に

説 － 兀古列、山 － 阿兀剌、海子 － 納兀児、門 － 額兀顛、言語 － 兀格、水 － 兀孫

のように、すべて「兀」で記されていたとも考えられる。ある時点でこれらのリストが、

説 － ~~兀古~~鳴詁列、山 － 阿~~兀~~屼剌、海子 － 納~~兀~~浯児、門 － 額~~兀顛~~閃闡

のように訂正され、本文の訂正は漢語傍訳を手がかりに行われたとは考えられないであろうか。

［注］

本稿は2005年8月19-21日に中国の呼和浩特（フフホト）市で開催された「中国蒙古学国際学術討論会」における発表をもとに加筆・補正したものである。

(1)服部氏の第三種ローマ字転写のc, jを本稿ではそれぞれč, ǰと表記している。

(2) ここで扱う「モンゴル語の音節 u/ü」と「服部氏の第三種ローマ字転写の u」とは、漢字に対応する表記および漢字の表す音として等価である。以下のローマ字転写はLigeti（1971）に若干の補正を加えた栗林・确精扎布（2001）の方式による。

(3)第8巻14丁10行目に「元年」（真實）とあるのは、「兀年」（ünen）の誤記として「兀」に含めて数える。

(4)第7巻34丁8行目に「阿^{中}兀剌」（山）とあるのは、「阿屼剌」（a'ula ）の誤記として「屼」に含めて数える。

(5)第9巻6丁1行目に「額閃迭訥」（門子的）とあるのは、「額閃迭訥」（e'üden-ü）の誤記として「閃」に含めて数える。

(6) ローマ字転写の中の「=」（イコール）の記号は動詞の語幹と語尾との境界を表す。

(7)出現位置は、四部叢刊本の巻数：丁数：行数をコロンで区切った2桁ずつの数字で表す。たとえば「01:33:05」は「第1巻：第33丁：第5行」を表す。

(8)用例中のローマ字転写で、「=」（イコール）で終わっているものは動詞の語幹形と同形の命令形を表す。

(9) 用例中のカギかっこ内の形（[$_{楊}$]）は欠字を補ったことを表す。ローマ字転写（[t]）も同様。

(10) 注の(4)を参照。

(11) 漢字「闡」は服部（1946：140）の第三種ローマ字転写ではdenとしているが、Ligetiの転写ではtenとなっている。ここでは、しばらくLigetiの転写に従う。

(12) モンゴル語niru'u/niru'unには「背、背中」という意味もあるが、ここでは「嶺」を意味する場合に限った。

NII-Electronic Library Service

Tohoku University

［引用・参考文献］

Haenisch, Erich　1937

Mangḫol un Niuca Tobca'an (Yüan-ch'ao pi-shi): Die Geheime Geschichte der Mongolen. Leipzig: Otto Harrassowitz.

Ligeti, Louis　1971

Histoire secrète des Mongols. (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta I.) Budapest: Akadémiai Kiadó.

Pelliot, Paul　1949

Histoire secrète des Mongols: restitution du texte mongol et traduction française des châpitres I à VI. Paris: Adrien-Maisonneuve.

小澤重男　1984-1986

『元朝秘史全釈（上）（中）（下）』東京、風間書房。

——　1987-1989

『元朝秘史全釈続攷（上）（中）（下）』東京、風間書房。

栗林均・碉精扎布　2001

『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』仙台、東北大学東北アジア研究センター。

白鳥庫吉　1943

『音訳蒙文元朝秘史』東京、東洋文庫。

陳垣　1934

『元秘史譯音用字攷』北平、国立中央研究院歴史語言研究所。

服部四郎　1946

『元朝祕史の蒙古語を表はす漢字の研究』東京、文求堂。

NII-Electronic Library Service